

令和元年 11月29日

令和元年度日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院（院長 黒井千次）は、芸術上の功績顕著な芸術家 7 名を、日本芸術院会員候補者として決定しましたので、お知らせします。

1. 日本芸術院会員候補者の決定

日本芸術院は、令和元年 10 月 18 日開催の会員候補者選考委員会にて選考の上、会員総会の承認を経て令和元年 11 月 13 日に 7 名を日本芸術院会員候補者として決定し、同日付けで日本芸術院長から文部科学大臣に上申しました。

令和元年 12 月 15 日付けをもって文部科学大臣から発令の予定です。

2. 文部科学大臣に上申した会員候補者（略歴・賞歴等は別添資料を御覧ください。）

【第一部（美術）】

第四分科（工 芸）

はるやま ふみのり
春山 文典

第五分科（書）

くろだ けんいち
黒田 賢一

【第二部（文芸）】

第七分科（小説・戯曲）

まつうら ひさき
松浦 寿輝

第八分科（詩 歌）

あらかわ ようじ
荒川 洋治（本名：荒川 洋治）

第九分科（評論・翻訳）

かめやま いくお
亀山 郁夫

【第三部（音楽・演劇・舞踊）】

第十分科（能 楽）

かめい ただお
亀井 忠雄

第十一分科（歌舞伎）

ばんどう たまさぶろう
坂東 玉三郎（本名：守田 伸一）

<担当>

文化庁参事官（芸術文化担当）

参事官補佐：中村 夢隆（内線 2823）

総括・顕彰係長：富田 祐子（内線 2825）

電話：03-5253-4111（代表）

日本芸術院

事務 長：西村 泰雄

電話：03-3821-7191

工芸

はる やま ふみ のり
春 山 文 典



推薦理由

春山文典氏は、東京藝術大学大学院を修了し、日展理事、現代工芸美術家協会常務理事を務めている。アルミニウムを造形的に仕上げる^{まれ}稀にみる作家であり、「風」や「宙」をテーマにした連作は、自然との^{たいじ}対峙から独自の表現となっており、日本現代工芸美術展内閣総理大臣賞、日展文部大臣賞、そして日本芸術院賞を受賞した。また、横浜美術短期大学学長（平成22年横浜美術大学に改組）なども歴任し、人望が厚く、日本芸術院会員にふさわしい人物である。

【略歴】

昭和20年5月9日 長野県生まれ 74歳

昭和44年 東京藝術大学美術学部工芸科卒業（同46年同大学院美術研究科工芸専門課程^ま鑄金専攻修了）

昭和51年 第15回日本現代工芸美術展初入選（「^じ時・^{かん}間」に対して）

昭和52年 第9回日展初入選（「^{あさ}朝の^{こうきょうばん}交響盤」に対して）

昭和58年 第22回日本現代工芸美術展審査員（後14回）

平成元年 第21回日展審査員（後7回）

平成9年 （社）日展評議員（同13年監事、同19年評議員、同23年理事、現在まで ※同24年公益社団法人へ移行）

平成14年 （社）現代工芸美術家協会常務理事（現在まで ※同25年一般社団法人へ移行）

平成16年 横浜美術短期大学学長（同28年まで ※同22年横浜美術大学に改組）

【賞歴】

昭和53年 第17回日本現代工芸美術展現代工芸賞（「^{しかくちゅう}四角柱インスコープ」に対して）

昭和54年 第18回日本現代工芸美術展現代工芸会員賞（「四角柱イン・ドップラー」に対して）

昭和54年 第11回日展特選（「四角柱イン・セクション」に対して）（後1回）

昭和54年 北方領土返還祈念シンボル像デザイン公募最優秀賞

昭和60年 第24回日本現代工芸美術展東京都知事賞（「^{むげんきょう}無限郷」に対して）

平成12年 第39回日本現代工芸美術展内閣総理大臣賞（「^{かぜ}風の^{はこ}箱」に対して）

平成12年 第32回日展文部大臣賞（「^{かぜ}風の^{もん}門」に対して）

平成28年 第72回日本芸術院賞（「^{そら}宙の^{かわ}河」に対して）

書

くろ だ けん いち
黒 田 賢 一



推薦理由

黒田賢一氏は、19歳の頃より本格的に書の道を志し、先達^{せんだつ}から注目を浴びてきた。更に鋭敏な感性で書の古典の研鑽^{けんさん}に励み、筆触の多様性、独特の運筆、簡明直截^{ちやくせつ}な線の響き合いによって、漢字仮名の枠を超える新鮮な書の表現に挑戦した。そして大字かなの表現の類型化を危惧した氏は、凛^{りん}とした線に当をえた要白（余白）を設定することで斬新で格調高い書の表現を試みた。また人書ともに映える高邁^{こうまい}な人物でもある。

【略歴】

昭和22年1月27日 兵庫県生まれ 72歳
昭和41年 西谷卯木に師事
昭和44年 改組第1回日展初入選（「猫柳^{ねこやなぎ}」に対して）
平成9年 第29回日展審査員（後7回）
平成19年 兵庫県書作家協会会長（同23年まで、同24年顧問、現在まで）
平成20年 四国大学文学部客員教授（現在まで）
平成23年 読売書法会常任総務（現在まで、同30年常任総務兼最高幹部会議副議長、現在まで）
平成23年 （社）日展理事（現在まで ※同24年公益社団法人へ移行）
平成29年 日本書芸院理事長（現在まで）

【賞歴】

昭和61年 第18回日展特選（「山里^{やまざと}」に対して）（後1回）
平成10年 姫路市芸術文化賞
平成14年 神戸市文化賞
平成15年 兵庫県文化賞
平成15年 大阪府知事表彰（文化芸術功労）
平成15年 第35回日展日展会員賞（「深雪^{しんせつ}」に対して）
平成21年 第41回日展内閣総理大臣賞（「静寂^{せいじゃく}」に対して）
平成23年 第67回日本芸術院賞（「小倉山^{をぐらやま}」に対して）
平成24年 姫路市芸術文化大賞
平成29年 神戸新聞平和賞
平成30年 地域文化功労者文部科学大臣表彰

小説・戯曲

まつ うら ひさ き
松 浦 寿 輝



推薦理由

優れた作家の常として、松浦寿輝氏も詩から出発した。「鳥の計画」は日本の現代詩に新生面を切り開いた傑作である。その後、「エッフェル塔試論」、浩瀚な「明治の表象空間」などの評論によって文明・文芸批評を展開するとともに、小説「花腐し」で芥川龍之介賞を受賞後、本格的に小説家としての活躍も目覚ましく、長編小説「半島」「川の光」「名誉と恍惚」等の秀作を発表して、その存在は現代日本文学の重要な担い手の一人として輝いている。

【略歴】

昭和29年3月18日 東京都生まれ 65歳

昭和51年 東京大学教養学部フランス学科卒業（同55年同大学院仏語仏文学専攻修士課程修了）

昭和56年 パリ第3大学大学院博士課程修了・文学博士

平成3年 東京大学教養学部助教授（同11年同大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・教養学部超域文化科学科教授，同21年同大学院総合文化研究科超域文化科学専攻長，同22年まで（専攻長），同24年退官（教授），同26年名誉教授）

平成15年 高見順賞選考委員（同20年まで，同30年から現在まで）

平成17年 毎日出版文化賞選考委員（同26年まで）

平成20年 読売文学賞選考委員（現在まで）

平成27年 毎日芸術賞選考委員（現在まで）

【賞歴】

昭和63年 第18回高見順賞（「冬の本」に対して）

平成7年 第5回吉田秀和賞（「エッフェル塔試論」に対して）

平成8年 第9回三島由紀夫賞（「折口信夫論」に対して）

平成12年 第50回芸術選奨文部大臣賞（「知の庭園—19世紀パリの空間装置」に対して）

平成12年 第123回芥川龍之介賞（「花腐し」に対して）

平成17年 第56回読売文学賞小説賞（「半島」に対して）

平成21年 第17回萩原朔太郎賞（「吃水都市」に対して）

平成24年 紫綬褒章

平成27年 第56回毎日芸術賞特別賞（「明治の表象空間」に対して）

平成29年 第53回谷崎潤一郎賞（「名誉と恍惚」に対して）

平成29年 第27回Bunkamura ドウマゴ文学賞（「名誉と恍惚」に対して）

令和元年 第75回日本芸術院賞（「小説，詩，評論など多くの領域において，高度の水準に達した作品を創造し続けた業績」に対して）

詩歌

あら かわ よう じ
荒 川 洋 治

(本名 あらかわ ひろはる
荒川 洋治)



推薦理由

荒川洋治氏は、20代の初めからひたすらに詩を書き続け、詩作の間に、また^{あふ}溢れるように詩論を、エッセイを発表し続けてきた。その詩編は現代詩にしばしば見られる独善や晦^{かい}渋^{じゆう}に陥ることなく読む者の想像力を開放し、エッセイもまた時代相に鋭く切りこみ、人の心に活気を与える。幾つかの詩・文学の賞の選考に貢献しながらも、氏はいわば日本詩壇の一匹^{おおかみ}狼^はとして馳せ続けてきた。ただその狼は、金子兜太風に言えば、いつも首のあたりに蛍の青い灯を一つとまらせていたのである。

【略歴】

昭和24年4月18日 福井県生まれ 70歳

昭和47年 早稲田大学第一文学部卒業

昭和57年 H氏賞選考委員（同58年まで）

平成7年 中原中也賞選考委員（現在まで）

平成11年 (財)高見順文学振興会評議員（同17年理事、現在まで ※同25年公益財団法人へ移行）

平成12年 高見順賞選考委員（同17年まで、同22年から同27年まで）

平成14年 (財)日本近代文学館評議員（同20年常務理事、同23年理事、現在まで ※同23年公益財団法人へ移行）

平成15年 愛知淑徳大学創造表現学部教授（同29年まで）

平成20年 太宰治賞選考委員（現在まで）

平成29年 川端康成文学賞選考委員（同30年まで）

【賞歴】

昭和51年 第26回H氏賞（「水駅^{すいえき}」に対して）

平成10年 第28回高見順賞（「渡世^{とせい}」に対して）

平成12年 第51回読売文学賞詩歌俳句賞（詩集「空中^{くうちゆう}の茱萸^{ぐみ}」に対して）

平成16年 第20回講談社エッセイ賞（「忘れられる過去^{わすれられるかこ}」に対して）

平成17年 第13回萩原朔太郎賞（「心理^{しんり}」に対して）

平成18年 第5回小林秀雄賞（「文芸時評^{ぶんげいじひよう}という感想^{かんそう}」に対して）

平成28年 第70回毎日出版文化賞書評賞（「過去をもつ人^{かこひと}」に対して）

平成29年 第8回鮎川信夫賞（「北山十八間戸^{きたやまじゅうはっけんこ}」に対して）

令和元年 第75回恩賜賞・日本芸術院賞（「処女詩集『水駅』以来、優れた詩集を持続的に刊行するとともに、充実した詩論を展開した業績」に対して）

かめ やま いく お
亀 山 郁 夫



推薦理由

21世紀において、明治時代に研究されていたドストエフスキーの翻訳が新しい文体でもって一段と深化された。亀山郁夫氏の新訳の「カラマーゾフの兄弟^{きょうだい}」(全5巻)は、文体の深化において注目され、読者の反響も大きく、この種の翻訳は「罪と罰^{つみ ばつ}」「悪霊^{あくりょう}」「白痴^{はくち}」においても質の高い成果が得られ、新しいドストエフスキーの世界を開くことになった。

【略歴】

昭和24年2月10日 栃木県生まれ 70歳

昭和47年 東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業(同49年同大学院外国語学研究科修士課程修了)

昭和52年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学

昭和52年 日本学術振興会特別研究員(同53年まで)

昭和57年 天理大学助教授(同62年まで)

昭和62年 同志社大学助教授(平成2年まで)

平成2年 東京外国語大学助教授(同5年教授, 同17年附属図書館館長・学長特別補佐, 同19年学長, 同25年まで, 同25年名誉教授)

平成20年 朝日賞選考委員(同29年まで)

平成25年 名古屋外国語大学学長(現在まで)

平成28年 第26回Bunkamura ドゥマゴ文学賞選考委員

平成29年 大伴家持文学賞選考委員(現在まで)

令和元年 第10回表象文化論学会賞選考委員

【賞歴】

平成10年 第7回木村彰一賞(「破滅^{はめつ}のマヤコフスキー」に対して)

平成15年 第29回大佛次郎賞(「磔^{はりつけ}のロシアスターリンと芸術家たち」に対して)

平成19年 第61回毎日出版文化賞特別賞(ドストエフスキー著「カラマーゾフの兄弟(全5巻, 翻訳)」に対して)

平成20年 プーシキン賞

平成25年 第64回読売文学賞研究・翻訳賞(「謎とき『悪霊^{あくりょう}』」に対して)

能楽

かめ い ただ お
亀 井 忠 雄



推薦理由

亀井忠雄氏は、能楽囃子方・亀井俊雄師^{はやし}の次男として、幼少より、父及び川崎九淵師始め数々の名人上手の指導を受け、華麗^{きわ}にして規矩^{きく}の正しさ、柔軟にして自在な境地を切り拓き^{ひら}、独自の芸風を確立、平成30年度、恩賜賞・日本芸術院賞を受賞した。今日、能楽囃子方の頂点に立つ第一人者^{そそ}として、数々の名舞台をリードし、重要無形文化財（各個認定）保持者として、後進の育成に力を注ぐなど、人格、識見、芸格ともに十分に有している。

【略歴】

昭和16年12月1日 東京都生まれ 78歳

昭和21年 父・亀井俊雄に師事

昭和24年 「熊野ロンギ」で初舞台

昭和25年 川崎九淵に師事

昭和30年 吉見嘉樹に師事

昭和39年 日本大学芸術学部演劇学科卒業

平成3年 (社)能楽協会常務理事（同9年まで ※同22年公益社団法人へ移行）

平成9年 (社)日本能楽会理事（同17年まで、同17年から同19年まで常務理事 ※同27年一般社団法人へ移行）

平成10年 葛野流宗家預り

平成24年 葛野流家元（同28年まで）

【主な海外公演歴】

昭和41年 アメリカ公演

昭和51年 世阿弥座公演（フランス、デンマーク、スウェーデン、東ドイツ）

昭和57年 世阿弥座公演（西ドイツ、オーストリア、スイス、フィンランド、ブルガリア）

平成2年 喜多流香港公演

平成5年 世阿弥座公演（ドイツ、アイルランド）

平成21年 観世流イタリア公演

平成28年 ニューヨーク公演

【賞歴】

平成6年 観世寿夫記念法政大学能楽賞（「大鼓^{おおつづみ}の演奏」に対して）

平成14年 重要無形文化財（各個認定）保持者

平成16年 紫綬褒章

平成19年 新宿区名誉区民顕彰

平成24年 旭日小綬章

令和元年 第75回恩賜賞・日本芸術院賞（「能楽の最高秘曲『姨捨^{おばすて}』を始めとする様々な曲趣を奏する卓越した技法による舞台成果」に対して）

歌舞伎

ばん どう たま さぶ ろう
坂 東 玉 三 郎

(本名 もり た しんいち
守田 伸一)



推薦理由

坂東玉三郎氏は、歌舞伎女形を代表する一人であり、その活躍は歌舞伎の舞台のみならず、他の舞台芸術や映像との交流にも及び、国内外で高い評価を得ている。また近年は、後進の育成にも熱心に取り組み、自身が当たり役としている役を若手の歌舞伎俳優に伝承することに尽力している。

【略歴】

昭和25年4月25日 東京都生まれ 69歳

昭和31年 十四代目守田勘弥の部屋子となる

昭和32年 「寺子屋」小太郎にて坂東喜の字を名乗り初舞台

平成4年 (社)伝統歌舞伎保存会理事 (現在まで ※同25年一般社団法人に移行)

平成24年 (公社)日本俳優協会常任理事 (現在まで)

【賞歴】

昭和46年 第21回芸術選奨新人賞

昭和46年 第8回ゴールデン・アロー賞演劇賞 (後1回)

昭和60年 都民文化栄誉章

平成3年 フランス芸術文化勲章シュバリエ章

平成5年 ジャン・コクトー国際賞

平成8年 ダンススクリーン96グランプリ

平成9年 モンブラン・デ・ラ・キュルチュール賞

平成10年 第39回毎日芸術賞

平成10年 第5回読売演劇大賞最優秀男優賞

平成21年 第57回菊池寛賞

平成24年 重要無形文化財 (各個認定) 保持者

平成25年 フランス芸術文化勲章コマンドゥール章

平成26年 紫綬褒章

平成28年 第72回恩賜賞・日本芸術院賞 (「歌舞伎女形を代表する活躍及び演技の成果」に
対して)

平成30年 第39回松尾芸能賞大賞

令和元年 第10回岩谷時子賞

令和元年 高松宮殿下記念世界文化賞

令和元年 文化功労者

(1) 概要

日本芸術院は、日本芸術院令第3条に基づき、芸術上の功績顕著な芸術家の中から補充すべき会員を毎年会員による選挙を行い決定しています。

日本芸術院は、その前身である帝国美術院が森鷗外を院長として大正8年に創設されて以来、現在まで約100年の歴史を持ち、日本芸術院会員への選考は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等の芸術各分野の芸術家から栄誉あることとして広く認識されています。

日本芸術院会員は、一般職の国家公務員（非常勤）で、年金額は250万円、任期は終身です。

(2) 選考方法

日本芸術院会員候補者の推薦は、毎年度、日本芸術院会員により行われ、全会員で組織する会員候補者選考委員会において選考します。その候補者について、各部において会員による投票を経て、総会の承認を得ることにより決定します。

(3) 選考経過

令和元年8月16日から8月30日までの間、日本芸術院の会員に対し候補者の推薦を求めたところ、第一部（美術）10名、第二部（文芸）11名、第三部（音楽・演劇・舞踊）2名、合計23名の推薦がありました。

令和元年10月18日に開催した全会員で組織する会員候補者選考委員会において、18名の被推薦者を会員候補者選考委員会が推薦する会員候補者としてしました。

当該候補者18名について、令和元年10月18日から10月25日にかけて、各部において投票を行い、令和元年10月30日開催の部長会議において開票した結果、第一部2名、第二部3名、第三部2名が部会員の過半数票を得て会員候補者に内定しました。

内定者について、書面による会員総会の承認を経て、令和元年11月13日に会員候補者として決定しました。

(4) 上申

上記会員候補者7名について、文部科学大臣に上申しました。

(5) 会員数（現員は令和元年11月13日現在）

日本芸術院会員（定員120名）は、第一部（美術：定員56名）は現員42名に2名加わり44名、第二部（文芸：定員37名）は現員29名に3名加わり32名、第三部（音楽・演劇・舞踊：定員27名）は現員24名に2名加わり26名となり、合計で現員95名に7名加わり102名となります。